



TITLE:

<大會抄録>平民教育運動における 晏陽初と陶行知

AUTHOR(S):

小林, 善文

CITATION:

小林, 善文. <大會抄録>平民教育運動における晏陽初と陶行知. 東洋史研究 1983, 42(3): 536-536

ISSUE DATE:

1983-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153908>

RIGHT:

大會抄録

平民教育運動における晏陽初と陶行知

小林 善文

一九二三年、中國における文盲成人の解消をめざして中華平民教育促進會總會が発足した。この組織の中で指導的役割をはたしたのが晏陽初と陶行知である。彼らの盡力によって平民教育運動は全國に擴大し、テキストである『平民千字課』の發行部數は三六〇萬部にも達した。だが、無償の識字教育として出發した平民教育運動は、運動推進母體の財政難・教員や受講生をとりまく生活の苦しさ・平民教育理論の魅力の乏しさ等々の要因のために行きづまりを見せてくる。この窮境を打開すべく晏陽初は、識字教育を中心とした從來の方針の上に生計教育や公民教育の要素を加えた新たな平民教育の普及をめざした。そして、農村に注目した晏は、洋行歸りの知識人を動員して河北省定縣に入り、総合的な鄉村改造實驗を行ない、その一環として平民教育を推進した。一方、晏と協力して平民教育を進めていた陶行知は、やがて運動方針をめぐって晏と對立し、獨自の平民教育理論の實踐をはかることになる。陶は中華教育改進社の援助の下に南京郊外に曉莊試驗鄉村師範を設立し、指導員や兒童と苦樂を分かち合いながら鄉村における教員養成と教育普及をはかっていた。五四時期に生まれた平民教育運動は、さまざまな形で實

踐されたが、そのうち國民革命期に至るまで繼承されたのは晏と陶の運動であった。そこで彼らの理論と實踐の異同を探ることを通して、平民教育運動の實態と本質を明らかにしていきたい。

高句麗長安城問題再考

田中 俊明

高句麗は、廣開土王期の領域擴大を経て、次王長壽王の一五年（四二七）に、その都を鴨綠江北岸の丸都城（國內城）から、大同江北岸の平壤城に遷し、新羅・百濟への壓迫を強めることになる。この當時の平壤城は、しかしながら、現在の平壤市街ではなく、その東北數kmにある大城山城とその一帯であり、現在の平壤市街に遷都されるのは、六世紀後半のことである。ともに平壤地域にあり、同じく平壤城と呼稱されるが、時間的な前後關係をもっていえば、前期平壤城・後期平壤城という形で區別できる。そして後者はまた、長安城とも表記されるのである。即ち、ここにいる長安城とは、六世紀後半以降、滅亡までの王都であった、後期平壤城を指す。

この長安城については、遷都の事實そのものを否定する見解もあるため、まずその點から再考する必要がある。そして遷都が存在したことを確認したうえで、城壁石刻など限られた史料を通して、あらためて築城過程・規模を考察し、あわせて遷都するに至った背景および遷都の意義を追究したい。この問題については既に、現在そ